

## ニューヨーク便り

ジュリア・Crowe 訳：関塚亮司

# Letter from NEW YORK

by Julia Crowe

### ●チャールズ・モコトフ

ニューヨーク生まれのチャールズ・モコトフはギター演奏家コースを専攻し、学士号をシラキュース大学で、修士号をイサカ大学で取得、マイケル・ロリマー、カルロス・ボネル、エドワード・フラワーに師事した。その後イサカ大学、ウェールズ大学、マンズフィールド大学、ノースイースタン大学、ブリッジウォーター州立大学でギター科の講師を務めてきた。既にプロのクラシックギタリスト兼ルネサンスリュート奏者として認められ、二度の極東ツアーを通じて香港のスタンダード紙から高い評価を得た他、カーネギーホールのワイルドコールで行なったニューヨークデビューが成功し、ニューヨークタイムズ紙は、彼を「奥深い、上品な音を奏でるアーティスト、洗練された技術と巧みに幅広い音を醸し出す」と好評した。

〈秋のエレジー〉というタイトルの彼のCDは、C=テデスコの〈悪魔の奇想曲〉、コープルの〈秋のエレジー〉、ロドリゴの〈ギターのための牧歌〉、横尾幸弘の〈さくら変奏曲〉、コシュキンの〈鳥たちの墜落〉、ロドリゴの〈小麦畑〉を収めている。このCDを聴いて、モコトフが15歳から深刻な聴覚障害を持つ人だと聞くと驚くだろう。

「私も、ギターを弾き始める多くの人たちと同じように、13、4歳の頃からロックバンドでエレキギターを弾いていました」とモコトフはいう。「その後大学でクラシックギターを弾く人に出会うまで続けていました。彼女は、オスカー・

キレゾッティの〈リュートのための6つの小品〉を熱心に練習していました。私は、それに刺激されてクラシックギターを始めたのですが、運よく、近くにスペインに留学してナルシソ・イエベスに師事したメアリー・アンソニー Mary Anthony という素晴らしい先生がいることを知りました。とても厳しい先生でしたが、その後ニューヨークのシラキュース大学で勉強するための基礎を教えてくださいました」

モコトフはイサカ大学を優秀な成績で卒業し、ギター演奏家課程で修士号を取得した。「大学ではエドワード・フラワー Ed Flower に師事しましたが、彼はプロのギタリスト兼リュート奏者を目指した私にとって最大の恩人です。私はそれまでに2つの楽器を演奏してきました。私が修士号を取得した年に、幸運にもイサカ大学のギター科の教授陣で長期休暇に入る人がいて、その後任のポストを私が手に入れました。とても良い選択をしたのと、すべてのギター学生が夢見る大学の講師の職を得ることができたことは、非常に心強かったです」

モコトフはマイケル・ロリマーに招聘されてノースカロライナで1年間、彼のマスタークラスに参加した。「ここで人生がすっかり変わりました。その年私は、世間に認められようと苦労しているギタリストたちを、プロの演奏家になるためには何をすべきか理解できるようなギタリストに育てたのです。私はボストンにあるノースイースタン大学にパートタイムの教職を得て、ギター科を立ち上げ、数年間運営しました。同時にボストン近郊の大学数校でパートタイムの仕事を得ました。ボストンは、私の人生で、プロのギタリストとしてのキャリア、即ち二度にわたる極東ツアー、CD作成、ニューヨークデビューを可能にしてくれたところなのです」

「最初のツアーは1986年にシンガポールから始まり、そこではギターコンクールの審査員も頼まれました。周辺の数カ所で演奏しました。翌年ツアーでフィリピンに戻りマニラ、セブなどの小国数カ所で演奏しました。それから香港に行き、帰国するまで数カ所で演奏しました。この二度目のツアーはアメリカの情報局が手配してくれました。この時のフ

ィリピンのことを今でも良く憶えているのは、有名なクーデターが起きてマルコス大統領が権力の座を追われた直後だったからです。混乱状態にある国で、身の安全を守ってくれたアメリカ情報局に感謝しています。マスタークラスを数カ所で行ないましたが、当時ほとんどの学生が中級レベルかそれ以下でした。それでもオーソドックスではない私の指導方法を良く受け入れてくれた上に、アメリカではめったに経験しないことなので驚いたのですが、食べ物や花を持ってお礼に来てくれたことです」

「マニラでは個人のお宅に泊めていただいたのですが、家主はアマチュアのギター製作者であり、非常に熱心なギター愛好家でした。私のコンサート・ギターに魅入られた彼は、ギターを地下室に持って行き、楽器の内部に明かりを入れて調べ、早朝までかかって、寸法を測り、図面を書いていました。私のギターのコピーがうまく作れているのかどうか、いつも気にかけています」

モコトフは1986年の夏に彼の最初のCDを制作している。「非常に忙しいコンサート・シーズンの終わりに、マサチューセッツのケンブリッジにあるハーバード大学のキャンパスにある教会で、オーディオの技術者やプロデューサーと1週間にわたり、每晚録音をしました。昼間の交通騒音を排除し、宗教施設ならではの美しい音を捉えるため夜にしたのです。その結果がこの録音で、サイズの大きいテープを使いました。その年の後半に海外ツアーと、1987年5月に予定していたニューヨーク市でのソロ・リサイタル・デビューの準備を始めました。マスターテープはCDになることなく、テープは22年間私のクローゼットの中に棚上げされていました」

「その時期、私は長い間ギターから離れて家庭を持ち、別の人生を歩んできました。そして2008年のある日、私はこのテープを取り出して、最後までもう一度聞いてみました。おもしろいレパートリーだったので非常に嬉しかったのですが、経年変化による音の劣化が気になりました。そこで、古い録音の音質を改善するためにカリフォルニアのハリウッドにあるバーニー・グルンドマンにテープを送りました。すると彼は見事に再生してくれたので、このCD〈秋のエレジ

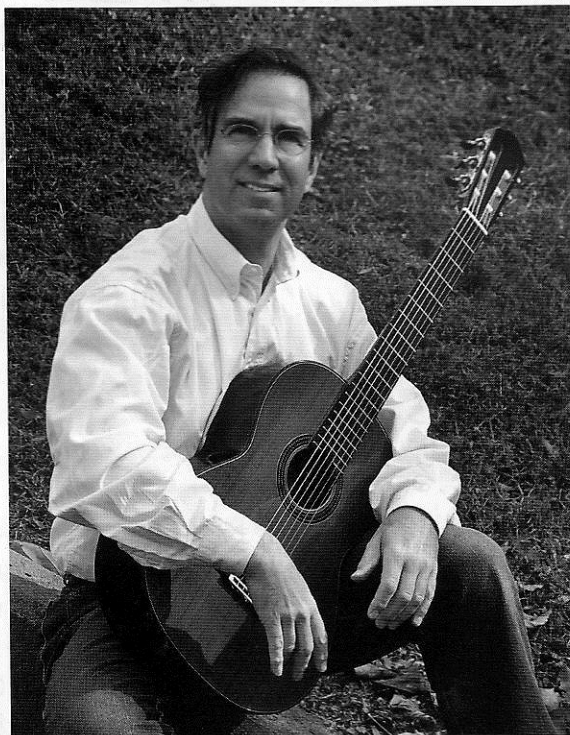
一)を製作したのです。タイトルは、このCDの2曲目に入っているウィリアム・コープルの私のために書いてくれた作品名から情愛を込めて名づけました」

「コープルの作品は、このコレクションの中で最も冒険的なものです。調性的でありながら、明らかに現代的な趣の作品です。私が今演奏している音楽は非常に伝統的な作品で、私のリサイタルによく来てくれる典型的な折衷派にアピールします。このCDに入っている音楽は、私がニューヨークデビューしたときの演奏です。カーネギーでのデビューが決まると、人は自分の持っている音楽的表現力と技量の最高のものを出すような演奏をしようとします。その時、私は現代音楽こそそれにふさわしいと感じました。しかし、私がニューヨークで演奏する音楽や、このCDに入っている音楽は、聴衆にとって無調でもなく、挑戦的でもありません。(秋のエレジー)はボストンの作曲家であるウィリアム・コープルが私のために書いてくれた作品で、私がニューヨークで世界初演したものです。この作品には、例えばロドリゴの音楽よりも新しい、20世紀の和声法が使用されていますが、それでもわかりやすい曲です」

モコトフが、このCDで演奏しているギターは、オランダのニコ・ファン・デア・ヴァールスによって1980年に製作された楽器である。「この楽器は、私がニューヨークデビューした時に使用した楽器です。2006年に演奏活動を再開して以来、他のギターも数多く所有してきました。しかし、皮肉なことに、これまでの15年間はこの1本のギターに忠実でした。それがインターネットの影響で、素晴らしいギターの魅力を知り頻繁に楽器を代えることになったのです。現在は2002年にドイツの名工マティアス・ダマンによって製作されたギターを使っていますが、このギターとは縁があって2009年に手に入れて以後、他の楽器は使っていません。しかし、現在カリフォルニアのギター製作家ランディー・アンジェラに注文を出しています。彼は本当に素晴らしい製作家なので、その彼が、現在私のために楽器を作

ってくれていることを思うとワクワクします」

モコトフが聴力の60%を失ったのは15歳の時で、それ以来補聴器を使用し、非常に助けられている。「私は音楽、講演、生活音などほとんどの音を、全て補聴器を使って聴きます。デジタル技術のお陰で、可能な限り自然に音楽が聴けるようにセットできる複雑なソフトを使



チャールズ・モコトフ Photo: Cindy Dyer

用した補聴器を使っています。私がかれを知ったのは、私が録音した音と、補聴器を使って聴く音のマッチングに時間をかけていたからです。私と一緒に働いてくれる聴覚学者が、ありがたいことに、この作業に全面的に協力してくれて、彼は私が異なる音域の中での1ないし2デシベル程度の音圧の違いを識別できる能力があることを認めてくれます。皮肉なことに、私は障害がありながら音楽に対する聴力は鋭敏のようです」

「私のプロとしてのキャリアを考えて、20年以上聴覚障害のことはできるだけ秘密にしてきました。コンサートを始めとして、クラスルームや電話なども静かなところでは問題ありません。しかし、もし私が障害を覆い隠すのを止めたら一体どうなるのか知りたいとも思っています。職業音楽家が深刻な聴覚障害

を持っているということは異常で不名誉なことと思われるかもしれませんが。一時ギターを休むことにした判断は、フルタイムの音楽家として練習し、指導し、自分のキャリアを管理することが大きな負担だったからです」

しばらくギターから離れていた時期のモコトフは、ITの分野でキャリアを積み、メリーランド州のベセスダにある国立衛生研究所にポストを得た。彼は昨年その研究所の交響楽団とヘンデルのハーブ・コンチェルトを演奏した。

「この2年間、よくぞ第二の人生を順調に進めてきたものだと驚いています。最初は完全に趣味であったのが、多くの地元や旅行を必要とする演奏会での成功し、そしてたぶんこの2~3年のうちにもっと多くの演奏会を通してプロとしての二度目の人生を始めようと思っているのです。今はこれがおもしろいし、何年も前に行なった練習によって磨かれたテクニックを、現在楽しめることに感謝しています。年齢を重ねることがすべて良いとは思いませんが、音楽を自然に解釈する能力や、若い頃に培った勤勉さ、そして練習時間を最も有効に使う方法を理解する能力は、熟年の素晴らしさであると確信します」

モコトフは、新しいCDの制作を予定しているが、「それは、過去数回のコンサートの“グレイテスト・ヒット”的なリサイタル風のアルバムになるでしょう」とのこと。

詳しい情報とオーディオクリップは <http://www.charlesmokotoff.com> にアクセスされたい。

#### ジュリア・クロウ Julia Crowe



シカゴ大学で英文学を学び、ニューヨークを拠点としたギター奏者、作曲家、執筆者。クラシックギターを基本としつつ、独自のフィンガースタイルの曲を演奏する。彼女の楽曲はナショナル・パブリック・ラジオで登用されている。クロウはイギリスのクラシカル・ギター誌、アメリカのギター・プレイヤー誌、フレツ、メルベイのギター・セッションズ、ダウンビート、サウンドボード誌などに執筆している。www.juliacrowe.com